Salon de café Komorebi

サロン・ド・カフェこもれび

へようこそ！ 2

もやいの活動拠点「こもれび荘」の内装が出来上がると、私たちはサロン開店準備のために、元喫茶店のマスター、レストランで働いたことがある人などに手紙を書きました。集まったのは、個性豊かな10人の仲間たち。

週に1度集まって、喫茶店の名前、メニュー、運営の仕方、値段、必要なもの……、一つひとつを決めていったのです。

「サロン・ド・カフェ　こもれび」という名前は、今は亡き河西さんと言う人が名付け親です。

河西さんは、スキーのインストラクターやフランスのレストランで勤務したこともある、ジャズと映画を愛するおしゃれな50代の男性でした。1996年に東京で開催予定だった「世界都市博覧会」に向けて事業を立ち上げたものの、突然の中止に見舞われたため、サラ金に追われ、離婚し、すべてを失ってホームレス状態に陥ったのです。病気になったのをきっかけに生活保護を受けるようになりました。みんなが気軽に寄り集まれる喫茶店を作ろうといったのも彼でした。河西さんは機嫌が良い時は、話題が豊富で楽しい人だった半面、機嫌が悪いと「もう、こんな喫茶店はやめる！」と宣言してぱったり来なくなったり、ささいなことで仲間と大喧嘩するトラブルメーカー的存在でした。思えば機嫌が悪い時は、体の具合も悪かったのでしょう。入退院を繰り返し、年々衰弱していくようでした。例のごとく何度かの「やめる！」宣言の後、みんなで相談してしばらく放っておくことにしました。しかしその間、河西さんはアパートで孤独死してしまったのです。あんなに寂しがり屋だった彼が、皮肉なことです。2年前のことでした。

忘れられない名づけ親

話はさかのぼりますが、喫茶店の名前を考えるとき、驚くことに河西さんは英語やフランス語を調べ、10個以上の名前を考えてきたのです。私はその時、彼のこもれび荘に対する思いの深さを知り、身が引き締まる思いがしました。当初、「サロン・ド・カフェ　こもれび」という名前は、カタカナが多くおしゃれ過ぎて恥ずかしいという声もありましたが、今ではこれ以外はあり得ないというほどなじんでいます。この名前を呼ぶたびに、私達は河西さんを思い出します。亡くなってもいつまでもみんなの心の中に生きているのです。

（NPO法人自立生活サポートセンターもやい・うてつあきこ）

「シルバー新報」9/15付